

アパートで聞いた話

小川未明

青空文庫

そのおじさんは、いつも考えこんでいるような、やさしい人^{ひと}でした。少年^{しょうねん}は、その人のへやへいききました。

「なにか、お話を^{はなし}してくださいませんか。」と、たのみました。

「どんな話^{はなし}かね。」と、おじさんは、聞き^きました。

「どんな話^{はなし}でもいいのです。」と、少年^{しょうねん}がいうと、おじさんは、つぎのような話^{はなし}をしてくれたのです。

二、三日^{にち}まえの新聞^{しんぶん}にあつたが、街^{まち}の中央^{ちゅうおう}へビルディングができるので、地^ちを深^{ふか}くほりさげていると、動物^{どうぶつ}の骨^{ほね}が出てきた。それを学^{がく}者^{しや}がしらべて、およそ二万年^{まんねん}も前の人間^{にんげん}の骨^{ほね}で、まだ若い二十歳^{さいせんに}前後^ごの女^{おんな}らしいが、たぶん波^{なみ}にただよって、岸^{きし}に死^し体^{たい}がついたものだろう。この街^{まち}のあるところが、当時^{とうじ}は海^{かい}岸^{がん}であつたのがわかるというのだ。

この記事^{きじ}を見て、私^{わたし}は考え^{かんが}えさせられた。大和族^{やまとぞく}より、もっとさきに住^すんでいた民族^{みんぞく}であろう。そのような遠い昔^{むかし}から、人^{じん}類^{るい}には悲^{かな}しみや、不幸^{ふこう}というものが、つきまどつ

ていたのを知ったからだ。いかなる災難か、またなやみからで、その女は死んだのであるが、若い身でありながら、人生のよろこびも、たのしみも、じゅうぶん知らずして、死んでしまったのだ。

幾十世紀かの間には、海が陸となったり、また陸が海になったりして、おどろくような事実があるにちがいないが、それよりも、人間の生命のはかなさというものを、より強く感じられる。そして、いつの世でも、一生をぶじ幸福に生きるということは、容易のことでないらしい。

このアパートの、下のへやにいる娘さんをごらん。つとめに出るときは、お化粧をして、そのふうがりっぱなので、人目には、いきいきとして、美しくうつるので、さぞゆかいな日を送つてゐるだろうと思うけれど、家へ帰つて、仕事をするときのすがたを見ると、つかれて顔色が青白いじやないか。母親が病気で長くねていては、自分気分がわるいからとて、休むことさえできないのだ。

ゆうべも、この窓から大空をながめると、数えきれないほどの、たくさんな星の群れだ。それらの星が、思い思い美しく光っている。なんとなく、見ていてうらやましい。おそらく、永久に夜ごと、こうしてさんらんとして輝くことだろう。それなのに、人

間^{かん}だけは、どうして、こんなにはかないのだ。

私^{わたし}は思^{おも}った。人間^{にんげん}には、みずからをまもり、あいてをとうとぶという美^{うつく}しい道^{みち}があつたのを忘^{わす}れたからである。それで、破滅^{はめつ}をいそぐような、自殺^{じさつ}をしたり、戦争^{せんそう}を起^おこしたりするのだ。

自然^{しぜん}界^{かい}に法^{ほう}則^{そく}があれば、人間^{にんげん}界^{かい}にも法^{ほう}則^{そく}がある。どの星^{ほし}を見ても、ほこらしげに、また安^{やす}らけく輝^{かが}くのは、天^{てん}体^{たい}の法^{ほう}則^{そく}を守るからだ。もし、星^{ほし}が、軌道^{きどう}をあやまつなら、瞬^{しゅん}間^{かん}にして、くだけで、ちつてしまつたろう。

「おじさんは、星^{ほし}を見^みるのが好きですか。」と、少^{しょう}年^{ねん}は、聞^ききました。

「私^{わたし}は、子^こ供^{ども}の時^じ分^{ぶん}、星^{ほし}空^{ぞら}を見^みるのが、なにより好^すきだつた。神^{かみ}さまのかいた絵^えでも見^みるようで、いろいろふしぎな空^{くう}想^{そう}にふけたものだ。」

「どうも、ありがとうございました。」と、少^{しょう}年^{ねん}は、おじさんのへやを出^でました。

つぎに少^{しょう}年^{ねん}は、元^{げん}氣^きな、ほがらかな青^{せい}年^{ねん}に話^{はな}を聞^きこうと思^{おも}いました。

「お兄^{にい}さん、なにか話^{はな}をしてください。」と、たのみました。

「どんな話だい。」と、ふいにいわれたので、彼は、おどろいて、少年の顔を見ました。

「なにか、ためになるような。」と、少年がいうと、青年は、うなずきながら、
「それなら、感心したことがあるよ。それを聞いてもらおうか。」と、まえおきして、

「このあいだ、にぎやかな町の通りを歩いたのだ。せまい往來を自転車が走り、自動車を通り、ときどき道はばいっばいの、トラックがいく。そのうえ、人間でごつたがえしていた。じつさい、どこもかしこも、人間ばかりだという感じがした。両がわの店では、たがいにおなじような品物をならべて、競争をしあっている。どこを見ても、ただ自分だけは生きなければならぬとあせているので、すこしものんびりとしたところがない。もし、おたがいに気持ちをかえて、生活を新しく出なおしでもしなければ、人間は、死ぬまで、この苦しみをつづけなければならぬだろうと、おそろしくなったよ。」

「しかし、お兄さんは、いつもゆかいそうに見えるがなあ。」と、少年は、いいました。なぜなら、頭はきれいにわけているし、くつはぴかぴか光っているし、口笛などふ

いて歩くし、どこにも、苦勞くろうなんか、なさそうだからでした。

「そんなに、ぼくが見えるかえ。」と、青年せいねんは笑わらつて、話はなしのあとをつづけました。

「それは、ぼくもたまには、ダンスをやるし、映画えいがや、スポーツを見みにもいくさ。なにしろ息いきづまるような世よの中なかのもの、それくらいはしかたがないだろう。だが、そんなことしたつて、なんにもならないよ。ただゆううつを感じかんるばかりだ。ところが、ほんとうに考かんがえさせられることがあつた。町まちを歩あるいていたときだ。とつぜん、頭あたまの上うへの拡声かくせい器きから、女おんなの聲こゑが、がなりはじめて、夏なつものの投げ売なうり宣せん伝でんや、駅えき前まえに喫茶きつさてん店てんが開かい業ぎようした広告こうこくや、その他たうるさくさえ思おもつたのを、なに町まちなん丁ちやうめ目のくつ店てんでは、みなさまによい品しなをお安やすくサービしますといったので、ぼくは、さつそくその店みせへいつてみる氣きになつた。それほどこつが必ひつ要ようにせまられていたのだ。すると、たしかにほかの店みせよりは、よい品物しなが安やすく買かえるので、求もとめたのである。

『時節じせつがら、みなさまの身みにもなつてみまして、てまえどもは、食たべていければいいという精神せいしんで、ご奉公ほうこうをしています。』と、主人しゅじんは、いった。いまだきこんな考かんがえをもつものがあるかと、なんだか、うそのような氣きがしたけれど、無上むじやうにうれしかった。

そして、急にこの世の中が明るくなつたようで、希望がもてたのである。たとえば、食うために、身を機械にしてアナウンスしても、あの女までが、いい仕事をしているように見えて、ぼくは、自分を恥ずかしく思つたのだ。」

「お兄さん。すると、自分のことばかり考えず、他人のことも思うなら、この世の中は、明るくなるんですね。」と、少年は、聞きました。

「それも、一人や、二人ではだめだ。道を歩くもの、電車に乗るもの、めいめいが職場をもっている。そして、社会と関係のない仕事というものはないのだから、みんなが、その気になればいいと思うのだよ。」

ふたりは、二人の話を聞いて、その日から、少年に、アパートの人々を見なおす気がおこつたのでした。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 14」講談社

1977（昭和52）年12月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「太陽と星の下」あかね書房

1952（昭和27）年1月

※表題は底本では、「アパートで聞《き》いた話《はなし》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2018年8月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

アパートで聞いた話

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>